

Cover Story

『パンダ』

今年のお正月、和歌山県白浜市にあるアドベンチャー・ワールド（以下AW）に行った。一番の目的は、パンダ。AWには現在6頭のジャイアントパンダが暮らしており、人もあまり多くなく「見放題」の状態だった。上野動物園のパンダ檻の前で3時間並んだ身としてはまさにAWは天国であった。

飼育員の方によると、パンダは気難しく、繁殖が難しい種類だという。年に2～3日しか発情せず、オスとメスの相性が良くないとカップルが成立しない。

しかしAWではなんとこれまで11回の出産、16頭の繁殖・育成に成功しており、この成功率はすごいらしい。そんなAWは中国の成都のジャイアントパンダ繁育研究基地の日本支部でもあり、パンダ繁殖技術が高く評価されている。

中国のパンダ外交は1000年以上と歴史があるとされているが、現代のパンダ外交のきっかけは、1920年代の欧米にあるとされている。当時欧米では白と黒のパンダが珍獣として扱われ、「パンダ狩り」がブームになり乱獲された。その後パンダは絶滅の危機に瀕し、現在でも世界で1600頭ほどしかいないとされている。このように、パンダは「外」の視点加わったことで厳しい状況に追い込まれた。それまで中国に普通に生息していたパンダだが、欧米人がパンダを珍しがる様子がきっかけで外交ツールとして使われるようになった。パンダ自体は変わらずとも、彼らをとるまく社会での価値観が変わることで、絶滅の危機に瀕してしまった。

2020年の「初ササ」を食べるパンダを見ながら、少し複雑な思いになった正月であった。



お昼寝中の桜浜（メス）

(kurita)

2期の定期試験後の期間を利用して、皇居東御苑に大嘗宮の一般参観に行ってきました（参観した3年生諸君も多くあって嬉しく思います）。会場では建築の諸要素（掘立柱・妻入り・鳥居・千木・堅魚木etc.）も注目でしたが、何より印象深かったのは、平成度より規模が縮小され、主要三殿（廻立殿・悠紀殿・主基殿）が萱葺から板葺に改められるなど材質が見直された（一部プレハブも！）とはいえ、それでも約3/4は木造で（全体の木材使用量は550m³）、さまざまな種類（や産地）の木材が使用されていたことです。

明治以来その建設にあたられている建設会社などによると、今回は主に長野県軽井沢町産のカラマツ皮付丸太1,100本、静岡県浜松市天竜区産のスギ皮付丸太131本、北海道産のヤチダモ皮付丸太が使用され、スギは主要三殿の外壁胴縁材に、ヤチダモは神門＝鳥居に使われました。そのほか奈良県や京都府などからも調達されたといえます（清水建設、林野庁中部・関東各森林管理局のWebsiteによる）。その具体的な樹種については、平成以前の記録から推測される限りでも、竹〔青竹〕・フジ〔藤蔓〕・シュロ（→縄）・ハギ+クロモジ+ツツジ（→柴垣）・イグサ（→畳表）など、調度品を含めれば、さらにカシワ（→「窪手」＝天皇が神饌を供える際の皿）・ヒカゲノカズラ（→冠）・サカキなどさまざまです。諸事情で樹種が変わることもあるようで、例えばカラマツは昭和度まではクヌギでしたが、平成度に安価で大量入手が可能との理由で採用されました（『平成大札記録』。以下『平』）。しかし、いずれにせよ、大嘗祭が多く樹木に支えられてきたことがよく分かります。

そんななか筆者が気になったのはスダジイ。柴垣や膳屋（神饌を調理する建物）の外壁に挿し挟まれているものです（写真）。恥ずかしながら筆者は当初サカキだと思っていましたが（なぜ祭祀でよく用いられるサカキでなくシイなのか。これが案外難しい問題で、目下不明とせざるを得ません）、調べてみると起源そのものは古く、平安時代の文献に「挿すに椎の枝（古語にいわゆる志比乃和惠）を将てせよ」（『延喜踐祚大嘗祭式』22大嘗宮条・『儀式』巻3）とあります。ですが、それがシイの仲間のうちスダジイであることが明示されたのは、意外にも平成度のこと（『平』）。管見の限りでは大正・昭和度の各記録にも単に「椎ノ和惠（差）」と出てくるにすぎません（『大札記録』・『昭和大札記録』。以下『大』・『昭』）。ただし、大正・昭和度のシイは京都の松尾大社産ですが（『大』巻104・『昭』第12冊）、同社にはスダジイ・コジイからなる古いシイ林があるそうですので（森林再生支援センターニュースNo. 33, 2013. 7）、大正・昭和度もスダジイの可能性が高そうです。

ところで、使用後の大嘗宮は解体・焼却されるのが原則でしたが、令和度については大半がバイオマス発電の燃料として再利用されることになっています（2019. 12. 9宮内庁発表）。まさに時代ですね。



スダジイ（大嘗宮主基膳屋南側）



柴垣に挿されたスダジイ（大嘗宮南神門西脇）

寒中見舞…といたいところですが暖かいですね。いまのところ今年は明らかに暖かく、毎年この時期に話題になる「初氷」も迎えていません。東京の初氷は100年以上前から観測されていますが、今年も1月15日現在まだです。これは観測史上もっとも遅く、これまでの初氷の遅い記録である1月13日を更新中です。ちなみにこの100年以上の間、初氷がない年はなかったそうです。

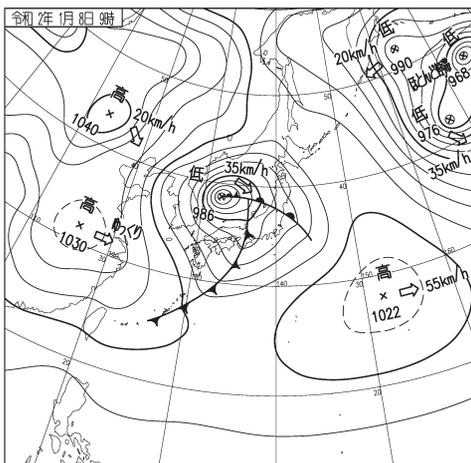
さて、図1は先週の1月8日の天気図です。日本海に低気圧があります。低気圧が日本海を発達しながら進むと、日本列島の広い範囲で南風が吹きます。この気圧配置はいわゆる「春一番」のパターンです。その季節にはまだ少し早すぎますね。関東地方ではこの日、前日までの寒気が残り滞っていました。実際に南風の影響を受けて暖かくなったのは、太平洋側の沿岸部の三浦半島や房総半島付近にとどまり、一時的なものに終わりました。

図2は昨シーズンの冬、典型的な冬型の気圧配置です。西の大陸に高気圧、東の海上には低気圧があって、日本列島は等圧線が縦じま模様になります。大陸の高気圧の中心気圧は(図では北西(左上)の欄外になりますが)1080hPa、オホーツク海にある低気圧の中心気圧が966hPaですから、100hPa以上も差があることとなります。この気圧差を埋めるために非常に強い風が吹きます。風向きは北西から南東方向へ等圧線を斜めに横切る方向です。この日は日本列島を9本(北方領土を除く)もの等圧線が南北に走っています。等圧線の間隔は狭いほど風は強くなります。北西の大陸から冷えた空気が日本海をわたって日本列島の山々にぶつかり、山は大雪になります。いわゆる「山雪型」です。そして太平洋側には水分を落とした乾いた空気が勢いよく山から下りてくる。関東地方では、この時期の冷たく乾いた北風を「空っ風(からっかぜ)」といいます。

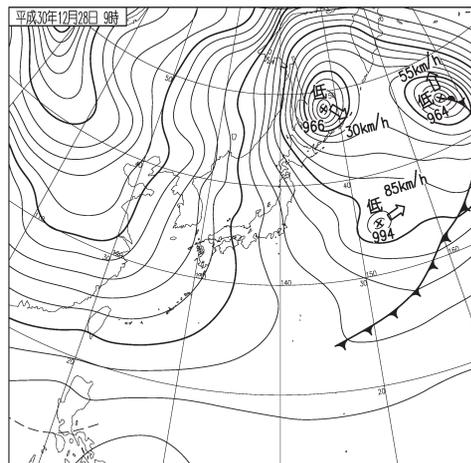
今年はこの縦じまの等圧線の間隔がまだ広く(1月中旬現在)、大陸の冷たい空気の流入は見られません。そういえば先日、スキー場の雪が不足している話を聞きました。

1月上旬の気象庁1カ月予想では、全国的に気温が「平年よりも高い」予想となっています。また2月、3月の3か月予想でも平年より高い確率が40%以上となっており暖冬の気配です。では雪は降らないのか？これほど高温の予想が出ると日本海側の積雪量は少なめになるのではないのでしょうか。ただ太平洋側の場合、大雪が降るのは太平洋側の南岸を低気圧が通過し、加えて上空に寒気が南下しているときです。図3は2018年1月22日の天気図で関東では大雪になりました。いわゆる「南岸低気圧」の気圧配置です。太平洋側の大雪のタイミングとしては、西高東低の冬型が緩んだとき台湾や東シナ海に低気圧が発生し、発達しながら日本の南岸を進むとき。それと同時に上空の偏西風の蛇行で北極方面から寒気が南下してくるときです。加えて岸から適當の距離があるのが通常で、北過ぎても南過ぎても雪は雨に変わります。目安は低気圧上空1500mの気温がマイナス6℃以下なのですが、これもまた絶妙で…。実は太平洋側の雪予想は気象予報士泣かせの難題です。

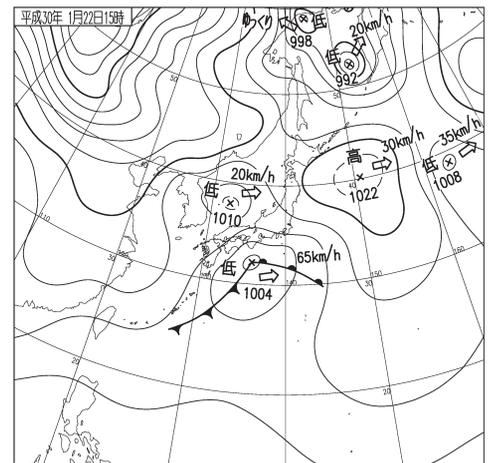
この冬シーズン、果たしてどうなるのか？毎日天気予報を見て予想しましょう！



【図1】
2020年1月8日の日本海低気圧



【図2】
2018年12月28日の西高東低の冬型



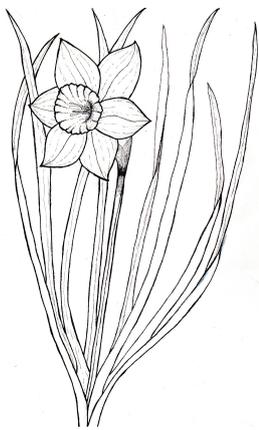
【図3】
2018年1月22日の南岸低気圧

HR棟東側でニホンズイセンが花開いているのを見ることができる(12~2月が開花期)。副花被と呼ばれる黄色い部分がよく目立つ。地中海原産で本来暖地を好むが、耐寒性がある。日本でスイセン(水仙)といえばこれだが、ヒガンバナ科で毒草であることはあまり知られていない(全草に毒を含む…、がこれを食べると中毒になったという話は中世ヨーロッパを除き、聞いたことがない)。生け花にする際に、切り花の汁で皮膚炎になる人は稀にいる。取り扱いに少し配慮が必要な植物である。

[2019年9月~2020年1月までの開花情報]

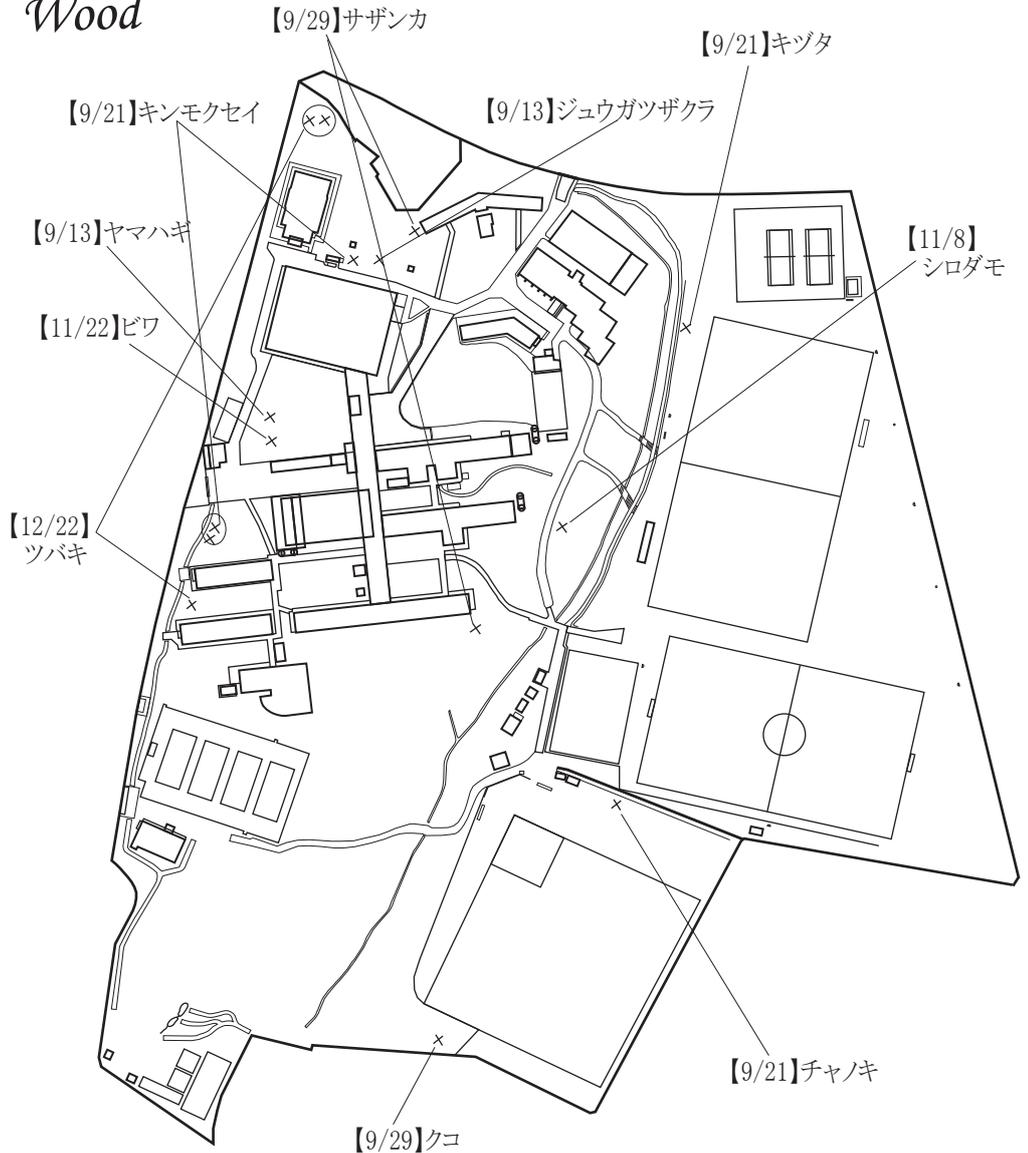
Grass

- 14.Sep.2019 ツルボ
- 20.Sep.2019 チカラシバ
- 29.Sep.2019 ヒメジソ,ヒガンバナ,カナダモ,イヌホオズキ,カナムグラ,シソ,センニチソウ
- 9.Oct.2019 ホトギス,アメリカセンダングサ,ツルドクダミ,セイタカアワダチソウ
- 21.Oct.2019 アレチヌスビトハギ,ノブキ,ヨシ,カントウヨメナ
- 8.Nov.2019 ツワブキ,ヒメヨモギ,ハッカ,
- 3.Dec.2019 ノブキ
- 25.Dec.2019 ミドリハコベ,ナズナ
- 7.Jan.2020 オオイヌノフグリ,ニホンズイセン,セイヨウタンポポ



【ニホンズイセン】
ヒガンバナ科スイセン属

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	動物	栗田 くり菜 (Kurita)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	風習・行事	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集・植物画	荒巻 知子 (Aramaki)